
MagicTheWord

コモリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c T h e W o r d

【Nコード】

N 0 5 7 1 E

【作者名】

コモリ

【あらすじ】

主人公・ルーナの両親は考古学者。ある日ユートピア（理想郷）と呼ばれる不思議な魔法を使う古代都市を探しに行つたまま行方不明に。行方不明になった両親を探すため、友達のカイとともに魔法の国へと旅にでる！！

1 (前書き)

これは一年前、夏休みの自由研究として学校に提出した作品です。金賞がとれたので一応はちゃんとしていると思います。

「これでも無い…」

ルーナは一つの本を探していた。

埃っぽい図書館の一室には、年老いた老人が1人か2人いる程度で、調べ物をするにはもってこいの状況だった。

「あつた…!!」

ルーナが手に取った一冊の古い本は『ユートピア』。古代文明についての本だ。

ページをパラパラとめくっていく。

「やっぱり…古代都市の伝説は、本当だったんだ…!!」

古代都市の伝説。それは、昔考古学者だった父と母から聞かされた話だ。

この世界の地下には、古代の人々が暮らしていたある巨大都市がある。そこでは現実で考えられないような魔法や夢のような世界が広がっていて、人はそこを、ユートピア（理想郷）と呼ぶ。

このユートピアという場所を探しに行つたまま、ルーナの両親は行方不明になつてしまった。その両親を探すために、ルーナはこの本を探していたのだ。

「早くカイに知らせなきゃ…!!」

持ち出し禁止と書かれたその本をこっそりリユックにつっこんで、図書館を走つてでた。しばらく田舎道を走っていくと、車の上でくつろいでいるカイを見つけた。

「カイっ!!見つけたよ!ユートピアについて書いてある本…!!」

ルーナが大きな声で叫ぶと、カイが怪訝そうに眉間にしわを寄せた。

「ユートピア…?」

「ユートピア!こないだ話したでしょ?古代文明について。」

少し考えるような素振りをした後、カイが納得したように頷く。

「あぁっ。あれな、地下の人間は魔法が使えるだのなんだのっての。」

「そうそれ！その本を見つけたんだよ！！」

リュックの中から先程の本を取り出し、カイの前に差し出す。

「こんな本どつから…ん？おいお前っ！この本持ち出し禁止って書いてあるぞっ！？」

「大丈夫大丈夫っ。ちよつと借りただけだし ばれないつて。」

そう言つてルーナは、本の重要な事の書いてあるページを開く。

「ほらここっ、ユートピアに行くにはつてとこ、よく見て！」

ルーナが指さした場所には、こう書いてあつた。

ユートピアに行くには、シュネルク山の滝の裏にある洞窟・・・

「・・・シュネルク山つて、ここの裏じゃねえかよ！！」

「そう！あそこ！これからあたし、あそこに行つてみる！！」

もう既に探検のための物は用意した。あとはこの場所に行くだけだ。

「ちよつ、待てよお前っ。お前の両親がそんなへんてこな場所にいるなんて限らないだろ？？もし行つてみていなくなつたらどうすんだっ？」

「そりゃあいるかどうかなんてわからないけど・・・でも、このままなにもしないでいるなんてあたしできないのっ！このまま待つても、お母さん達は帰つて来ないような気がして・・・」

しばらくカイは考え込んでいたが、途中で一つため息をついて立ち上がった。

「仕方ねえな・・・俺も着いてつてやるよ・・・」

「えっ？本当？？」

「だつてお前みたいだなドンくさいのが一人で行つたところで、どうにかなるわきゃねえだろ？それに・・・」

「それに？」

「俺、こういふ冒険、一度でいいからやってみたかつたんだよなっ」

こうしてあたし達の冒険が、幕を開けた。

1 (後書き)

読んでくれてありがとうございます。下手な文章だと思いますが、少しでも楽しんで読んでくれる方がいたらうれしいです。

「ここだ・・・！」

山道を登ってきて、やっと本に書いてあった洞窟の入り口に着いた。ひんやりとした洞窟の中は、どこからか光が漏れているのか、薄っすらと明るかった。

「なあ、この洞窟のどこからそのユートピアってーのに行けるんだ？」

「えーと、確か洞窟の一番奥に大きな扉があつて、そこから行けるつて書いてあるんだけど・・・」

しばらく進んで行くと、洞窟の最奥に着いた。

「で、こっからどうすんの？」

「・・・知らない・・・」

「おまつ！知らないってどうすんだよ！！」

「だって〜！」

とりあえず行き止まりの壁を触る。何か薄っすらと文字みたいなものが彫られているような手触りがあつた。

「あつ！これ！！何か書いてある！！」

懐中電灯で文字を照らす。

「古代文字・・・かなあ？」

「・・・我は血の契約を交わす者。我はこの地を制するもの。精靈よ、我を導きたまえ。」

突然カイがそう呟いた。

「えっ？何？急に??」

「・・・いやっ・・・なんか急に頭に浮かんだっていうか・・・俺も良くわかんねえ。」

その時、大きな音と共に目の前の壁が動いた。

「カイすごい！！」

「すごいのはいいけど・・・何か俺ら、引っ張られてね・・・？」

「えっ?」

その瞬間、壁が動いて出来たわずかな隙間に、ルーナとカイはすごい力で吸い込まれた。

「きゃあ〜!!」

「わあー!!」

隙間に吸い込まれたと思ったら、出たところは空で、二人はどこまでも落ちていく。

「・・・おいつ!ここ、俺達の町じゃねえぞ!?!」

下に広がる景色を見てカイが叫ぶ。

「じゃあ!あたし達っ、来れたんだ!!ユートピアに・・・!!」

「来れたのはいいけどどうすんだよ・・・!?このままいったら俺達・・・!!」

カイの声はそこで途切れた。恐怖で気を失ったようだ。

「ちよっ!カイ!?一人だけ氣い失わないでよー!!!!」

あまりの怖さに、何故だか気を失えない。

「きゃあー!ー!ー!ー!!」

もうだめだ。そう思った瞬間、体がフワツと浮いた。

「お嬢ちゃん達、ホウキも持たないでどうしたの??」

隣に、ホウキにまたがったおばさんが浮いていた。

「あっ・・・えつと・・・」

「まあっ。変った服ね・・・もしかして、あなた達っ、異世界から来たの??」

「あっ、はいっ・・・」

「まあ大変っ!!まさか異世界の人に会えるなんてっ!!あたしの家この近くのの!!坊やが起きるまでもいいから寄って行って!!」

次の瞬間、まわりの景色が空から一気にどこかの部屋の中へと変わった。

「えっ・・・??」

「瞬間移動したのよ。100メートル以内なら誰だってできる魔法

よ。」

「魔法・・・！」

「やっぱり、来れたんだっ。ユートピアにつ。お母さん達がいるかもしれない、この世界へ！！」

「ごめんなさいね、汚くて。とりあえずそのソファアにでも座っていて？今コーヒーを入れるから。」

カイを座ったまま寝かせて、ルーナはソファアに腰を下ろした。

部屋の中は元いた世界と全然変わらず、どこにでもあるような普通の造りだった。

「私の名前はマール。あなた達の名前は？」

「ルーナですつ。こつちがカイっ！！」

「ルーナちゃんとカイ君ね？それにしても異世界の人と会えたなんて・・・！夢みたいっ！！私の母親はね、あなた達の住んでいた世界の人のつ。昔からよくそつちの世界の話をしてくれてわあ。だからずつと異世界にあこがれてたの！！」

マールさんはニコニコと人の良さそうな笑みを浮かべた。

「ところで、なんで異世界の子達がこの世界に来たの？」

「あのつ、実はあたしの両親、この世界のことを調べていて、そのまま行方不明になつちやつたんです。それで、もしかしたらこの世界にいるんじゃないかと思って、探しに来たんですけど・・・。」

「あらそれは可愛そうに・・・。」

「んっ・・・」

その時、気絶していたカイがゆっくりと目を覚ました。

「あれ・・・？俺・・・。死んだのか・・・？」

「死んでないよ。落ちてたあたし達をマールさんが助けてくれたんだよ！」

ルーナはカイが寝ていた間の話を説明した。カイは頷いてはいたが、いまいち理解してない様子だった。

「そうかわっ！！」

何かを思い出したようにマールさんが叫んだ。

「2・3年前にね、異世界の人間が二人この世界に来たって話を聞いた事があるわ！」

「思えがけない朗報に思わず耳を疑った。」

「やっぱりお母さん達はこの世界に来てたんだ……!!」

「あのっ、その異世界の二人って今は……」

「……残念だけど今はどうしているか知らないわ。でもね、確か、西のハウベルって街のドーナッって魔女がその二人と接触したって聞いたの。だからもしかしたら、その魔女なら何か知ってるかも……」

「じゃあお願いですっ！そのハウベルって街に行くにはどうすればいいんですか??」

「両親と会えるかもしれない。その思いで、ルーナはいっぱいだった。」

「地図をあげるわ。行きたい場所の名前を言っと、その場所までの詳しい行き方を映像で教えてくれるのっ。」

「わあ〜魔法って本当にすごい!!」
「しばらくして、」

「ご親切にありがとうございますっ。じゃああたし達これからその魔女に会って来ます!!」

「あっ、待って!その服のままじゃ何かと目立つでしょ?」

「そう言っただけでおばさんは、パチンと指を鳴らした。」

「わあっ!服が!!」

二人の着ていた服が一瞬にして、動きやすい変わった感じのものになった。

「ありがとうございますっ!!何かから何まで!!」

「いいのいいのっ。それと少しばかりだけど2人のポケットの中にお金を入れておいたわ。私からの気持ちっ!!」

おばさんが言った通り、ポケットの中に手をつっこんでみると5枚ほどのコインと、2枚ほどのお札が入っていた。

「いいんですか??お金までもらっちゃって……」

「いいのよ。さあ、いってらっしゃい!!」

マールおばさんにお礼を言って、あたし達はその家を出た。

「それにしても・・・」

外に出て見ると、空を飛び回る人達や、変った形の家々が立ち並んでいた。

「なんかすげえな。この世界って。」

「・・・うん。」

「つーか、とりあえずどっちの方向行か調べようぜ。」
ルーナが地図を開く。

そこにはまた、あの古代の文字が書き表されていた。

「目的地を唱えよ、だとさ。」

「だからなんでこんな変な記号みたいな文字が読めんよ!!」

「知らねえって!!んな事今は関係ねえだろ!!」

「わかったわよ!!えっと・・・カウベル」っ!!」

と、また違った文字が出てくるだけで、映像は全く現れる気配はなかった。

「ばかつ!!『カウベル』じゃなくて『ハウベル』だろ!?貸せ!

!俺がやるっ!」

カイがルーナの手に使っていた地図を奪い取り、唱えた。

「ハウベル!」

その瞬間、地図に立体的な建物の映像が浮かび上がった。

「すごいすごい!!えくと、この道を真っ直ぐ行って・・・」

「とりあえずわかるとこまで行ってまた地図見ればいいだろ?」

「そうだね。」

真っ直ぐ歩いて行くと、まわりにはたくさんの店が立ち並んでいた。どうやらここは商店街のようだ。

「ねえねえ!なんかすっごいおもしろそうだよ!!ちよつと見ていこつよ!」

「あつ!おいちよつと待てよ!」

カイの返事を聞く前に、ルーナは真横にあつたお店の中に入つて
いた。カイが慌てて後を追いかける。

店の中に入つてみると、そこにはきれいに光るガラス玉みたいなも
のがたくさんビンに入つて売られていた。

「きれー・・・」

「・・・おやお嬢さん。あんた異世界の子だね？」

店の人つぽいおじいさんが、椅子に腰掛けながら口を開いた。

「えっ？そうですけど・・・そんなに目立ちます？」

ルーナは自分の姿を見回した。回りに歩いていた人達と、たいして
見た目は変わらないと思つてただけど・・・

「いやいや。そうじゃない。若いもんには絶対に見分けはつかない
と思うが、わしのように歳を重ねた者からすれば一目でわかるもの
じゃよ。」

そう言つておじいさんにはっこりと笑つた。

「おいルーナっ！勝手に行動すんじゃねえよ！！」

「あっ、ごめーんっ。」

怒つた様子でカイが店の中に入つて来た。

「っーかここ、何の店だ？」

「えっ？知らない・・・何のお店ですか？ここ」。

「まあ言つなれば薬屋かのお。」

「『スモルー』。効能、子ねずみほど小さくなる・・・って、なん
だこれ？」

カイが置いてあつたビンの一つを見て言った。

「・・・それは小さくなる薬。ここはそういつた変つた効能のある
薬を扱う場所なのじゃよ。」

「すごい！！ねえカイっ！こっちのピンクのは??？」

「めんどくせえなー・・・『ラブリー』。効能、意中の相手に飲ま
せると、その相手は飲ませた相手のことを好きでたまらなくなる・
・って、これ惚れ薬つてやつか!?!いいのかよこんな人の気持ち操
るようなもん売つてて!!！」

カイの話聞いて、ルーナは目を輝かせた。

好きな人が自分の事好きになってくれるなんて・・・夢みたいっ！！
ルーナは大好きなアイドル歌手の顔を思い浮かべた。

「ふおっふおっ。その効能は一時間だけじゃよ。少しの間でも自分を好きになつてくれるならいいという女の子向けじゃ。」

ルーナは「ちっ」と舌打ちした。

「まあいい。行くぞルーナ。」

カイがルーナの腕を引っ張った。

「えっ、ちよっ、何か買つていこうよ！！」

「はあ？お前こんな得体の知れない店で買い物なんかしたら絶対ばつたくられるぞっ。」

「大丈夫だよ！マールおばさんにお金の安い高い教えてもらったもん！！」

こんな面白そうなところで何も買わないで行くなんて、「冗談じゃない。

「おじいさん！これっ！これください！！この青いきれいなっ！」

「おいルーナっ！」

ルーナは適当に近くにあつた青い飴玉を指さした。

「それは・・・真実を教えてくれる薬じゃ。何か本当のことを知りたくなつた時に使いなさね。」

「いくらですか？？」

隣でぎゃんぎゃん騒いでいるカイを無視して言った。

「・・・特別に・・・1ペッドでよかるう。」

「いいんですかっ！！やつたあ。」

この世界のお金は1ペッドが一番安いのだ。

さっそくお金を払つて、その飴玉を一つもらった。

「じゃああたし達これだ！！」

文句を言い続けるカイを引きずつて、ルーナはその店を後にした。

「またおいで・・・。」

二人がいなくなった後、薬屋の主人は一人呟いた。

「それにしてもあの男の子、どこかで・・・いや、まさかな・・・」

そう言ってまた、一人店番を続けた。

薬屋からしばらく歩いて、二人は今、街を抜けて森の中を歩いていた。

「ねえ、まだ『ハウベル』って街には着かないの?」

「こんな早く着くわけねえだろ。後少し行ったとこに宿屋があるらしいから、今日はそこで休んでくぞ。」

10分ほど歩いて行くと、前方にアンバランスな、赤い屋根の建物が見えてきた。

「やった!宿屋だつ!!!」

勢いよく走って行き扉を開けた瞬間、ルーナは固まってしまった。

「どうした?」

後から追いついたカイが不信に思いたずねて中を見ると、中は現実とかけ離れた光景だった。

大きな荷物を持って立っているフランケンシュタイン。数人の仲間と話している吸血鬼達。おまけに受け付けをする場所に座っているのは牙を剥き出しにした狼男。

「おつ、お化け屋敷・・・?」

「・・・いや、魔女もいんだからこういうのもありなんじゃないか・・・?」

おそろおそろの中に入って、受け付けの狼男に話し掛ける。

「・・・あの・・・すいません・・・。今晚ここに泊まりたいんですけど・・・」カイがそう言った瞬間、狼男の目がキラリと光った(気がした)。そして口の端を吊り上げ、にたりと微笑んだ。

「やばいっ!!喰われる!!」

「いらっしやいませー!!」

狼男は愛想良くそう告げた。

「二名様でよろしいですかー?」

「へ・・・?あつ、はいっ。」

「そうしますとただいまお一人様ずつのお部屋をご用意できませんので、お二人様同室になってしまいますがよろしいでしょうか？」

「はぁ。。。」

「おそれいりますー！2名様入りまーすー！」

どこのファミレスの様な軽いノリで、二人は部屋へと通される。

「なっ、なんか・・・拍子抜けしちゃった・・・。」

「・・・俺も。」

通された部屋は意外と広くて、ベランダまでついていた。

部屋に適当に荷物を置き、下の食堂へと降りていく。

適当な席に腰を下ろす。やはり回りは吸血鬼とかばかりだった。

「結構おいしいね！！！」

ウェイター（狼男）が運んできた料理は、こんがり焼けたパンにトマトと大豆のスープ、味付けされた豚肉で、シンプルながらもなかなかの味だった。

「・・・ねえ知ってるー？『黒猫』が消えたって噂っ！！！」

隣にいた魔女達の話し声が聞えて来た。

「知ってるわよー！でも正確には『消えた』じゃなくて『消された』らしいわよ？？2年前どこかに追放されたって！！！」

魔女達の興奮っぷりに首をかしげる。

「・・・ねえカイ。黒猫ってこの世界じゃそんなに不吉なのかな・・・？」

「・・・知らね。普通魔女つつつたらペットに黒猫飼ってるイメージだけだな。」

食事を済ませて部屋に戻り、その日はすぐに眠りについた。

変った宿屋から出て、森を抜けたところに、ハウベルという街は存在した。

「前の街もすごかったけど、こっちはそれ以上だね・・・」

何軒も高い建物がそびえ建ち、空を飛ぶのは魔女だけでは無く、恐竜みたいなのもいた。

「えつと確か・・・魔女のドーナさんって人に会えばいいんだよね？」

「ああ。その人ならもしかしたらお前の両親と接触してるかもしれないんだろ？えつとドーナさんの家は・・・あっちだ!!」

街の人ごみを掻き分けて進んで行く。途中、壁に何か張り紙がしてあった。遠目でよくわからないが、黒い髪の男の子が書いてある。

何か・・・カイに似てる・・・？

何故だかわからないけどそう思い、カイに聞こうとしたけど、カイがそんなものに載るわけないと、口を閉じた。

「ここだ・・・。」

カイとたどりついた場所は、街はずれの小さな家だった。

「・・・ごめんください。」

ドアを数回叩くと、やさしそうなおばあさんが出て来た。

「・・・あらまあ。こんな小さな子達がいったい私に何のようだい・・・？」

「・・・あの、少し前にドゥーベルさんが接触した異世界の人達に着いてお話を伺いたいのですが・・・？」

「ああその話・・・まあ立ち話もんだから中にお入り。」

ドゥーベルさんの家に入ると、リビングらしきところすこい数の

本が置いてあった。

「・・・私はねえ。昔異世界について調べる仕事をしてたの。それでこれだけいろいろな本が置いてあるのよ。」

異世界について調べてたって・・・お母さん達と同じ考古学者みたいなのだったのかな？

「・・・異世界から来た二人に会ったのは・・・確か2年ほど前だわ。誰かから私が昔異世界について調べていたのを聞いたみたいで、私に異世界に戻る方法を尋ねて来たの。」

「それで・・・？」

「残念だけどわからないって言ったわ。そしたらそのままこの家を出て行ったの。確かその二人の名は・・・モーリとリゼナって言ったかしら？」

「やっぱり・・・！！」

お母さん達だ！お母さん達もこの世界に来てたんだ！

「・・・でもねえその後その二人・・・黒猫に捕まったらしいのよ。」

「黒猫？」

二人は目を丸くした。

宿屋で魔女達が話していたあの話。あれがいつたいなんの関係があるのかな・・・？

「・・・黒猫を知らないの？黒猫っていうのはねえ・・・ちょうどあなた達と同じ歳ぐらいの天才魔術師よ。多くの禁断の魔法書を盗み出していて、その黒い髪と、動きのすばやさから、人は彼を黒猫と呼んでいるの。そして・・・その禁断の書に書いてある魔法を使うために、黒猫はその二人をどこかに閉じ込めたらしいのよ・・・。」

「そんな・・・！！」

許せない。

ルーナは唇を噛み締めた。

自分の事のために、あたしの両親を利用するなんて・・・！！

「あたし・・・どうすれば・・・。」

あの宿屋で、魔女達は、『黒猫が消えた』と言っていた。

自分の両親の居所を知っているその人が消えたなら、どうやってお母さん達を見つければいいのだろう・・・？

「・・・どんな事情かわからないけど、黒猫のてがかりなら教えてあげられるわよ・・・」

そう言っつてドゥーベルさんは懐から地図を取り出した。

「・・・この地図の使い方は知ってるわね？これで『ジェルク』と唱えてごらんさい。黒猫が前に住んでいた家の名前よ。結界の力が強すぎて、今まで誰一人として入れなかつただけど・・・もし本当に黒猫が消えたのなら、もしかしたら・・・入れるかもしれないわ・・・」

そこに行けば、もしかしたらお母さん達の手がかりがあるかもしれない・・・！

ドゥーベルさんにお礼を言っつて、あたし達はその家を後にした。

「ここだよね・・・？」
あたし達は大きな、まるでお化け屋敷みたいな見た目の建物の前にいた。

「どこから入ればいいんだろ・・・？」
「ここだろ？」

カイが目の前大きな扉に手をかけた。

「ちよっ！カイ！危ないよ！？結界が張ってあるかもだしっ、ほかの入り口探そうよっ！！」

「なにがあぶないんだよ？もういないんだろ？その黒猫っつーのは」
「
カイがゆっくりと手に力を加え、重い扉を開く。

「ほら。全然平気じゃねえかよ。」

「うん・・・。」

中に入ると、赤い絨毯の敷き詰められた床が広がり、壁際に何個か扉があった。

「なんか中までお化け屋敷・・・。つてかどの扉から入ろう・・・？」

「手っ取り早く端っここから順に開けてくぞ。」

カイが一番端の扉をあける。

「すご・・・！図書館みたい・・・！！」

5・6メートルほどの高さの巨大な本棚がたくさん置いてあり、そこにはぎっしりと分厚い本が入っていた。

「・・・なんだ・・・？」

「へ？どうしたの？カイ？」

カイが呆然と呟いた。

「なんか俺・・・ここ・・・いや、やっぱなんでも無い。」

「？変なの。」

とりあえずいろいろな本を眺めて行く。

「お母さん達が利用された魔法が載ってる本って……どれだろ……？」

「……これじゃねえか？」

カイが一冊の革表紙の本を取り出した。

ペラペラとページをめくり、カイの手が止まった。

「何だ……？何なんだ……？さつきから……」

この本を自分は、前に見ている。

本当は、この屋敷を見た時から、何かおかしかった。

見た事のあるはずの無い風景、来た事のあるはずの無い場所。

それなのに、何故だか懐かしく感じた。

そして、頭の中を過ぎる自分以外の誰かの……記憶。

自分？

そういえば、自分とは誰だ？俺はいつたい……誰なんだ？

その瞬間、カイの頭の中にいくつもの記憶が舞い戻って来た。

そう、天才魔術師。黒猫としての、記憶。

「あぁっ……！！！」

カイが突然頭を抱え込み悲鳴とも言えない声を上げた。

「えっ、なに！？」

カイの様子に、驚くルーナ。

「……そうだ……俺だっただよ……黒猫……。」

「えっ……？」

ルーナは一瞬、カイが何を言っているのかわからなかった。

カイが黒猫？

「なに……言ってるの……？」

「……俺が黒猫だ。」

「そんな嘘……！」

「嘘じゃない。記憶が戻ったんだ。」

「そんな……！じゃあ、あたしの両親を閉じ込めたのは……力

イ……？」

「それは違う!!」

自分は確かに『黒猫』だ。だが、ルーナの両親を閉じ込めたのは俺じゃない。閉じ込めたのは……

「あいつだ!!」

「えっ!？」

「お前の両親を閉じ込めていたのは……ドゥーベル。俺の……師匠だ……!」

その瞬間、目の前に……ドゥーベル。あの魔女が現れた。

「……おやまあ。やっと思い出したのかい……?」

魔女が薄っすらと微笑を浮かべた。

「思い出したのなら話が早い……早く滅びの呪文が書いてあるあの禁断の書をお渡し……?」

「……何の事だ?」

「しらばつくれるんじゃないよ……っ!!お前が……あの本を異世界に隠したっていうのはわかってるんだよっ!!」

ルーナは混乱していた。

カイが黒猫?ドゥーベルさんがあたしの両親を閉じ込めてる?

意味わかんない。

もう、何がなんだかわからないよ……

「俺はそんな本、知らないっ!」

「嘘をつくなっ!!」

その瞬間、魔女の手から青白い閃光が迸り、二人の足元に叩きつけられた。

「わっ!!」

その光を避けた時にバランスを崩し、ルーナはその場に倒れこんだ。「おお……まさしくその本は……禁断の書!!」

倒れこんだと同時にバックが開き、ルーナの荷物と一緒に図書館に置いてあったあの本が飛び出した。

「こっ……この本がなんだって言うんですか……?」

ルーナは起き上がり、その本を手にとって見た。

「文字は書き換えられているようだが・・・確かにそれは、禁断の書・・・!」

「違う!!」

カイが叫んだ。

「だから嘘をつくんじゃないと言ってるだろう??・・・お嬢ちゃん。その本を私に渡しなさい・・・?そうすればお嬢ちゃんの願いを一つだけ叶えてあげよう・・・」

願いを?

その言葉に、一瞬心が揺らいだ。

願いを叶えてくれるというなら・・・

・・・あたしのお父さん・お母さん達を返してくれるの・・・?

「ルーナ!だめだ!!願いを叶えてくれるなんて嘘だ!!そいつに本を渡したらっ、この世界が滅びる!お前の両親達も返って来ないぞ・・・!?!」

そんな・・・

あたしは、どうしたらいいの?

その時、ルーナは足元に転がっているあの飴玉を見つけた。

真実を教えてくれる・・・飴玉・・・?

ルーナはその薄いビニールで包装された飴玉を広い上げ、口に含んだ。

・・・お願い!教えて・・・!あたしは・・・どうしたらいいの・・・?

瞬間、ルーナの頭の中に一気にある映像が駆け抜けた。

薄暗い部屋・・・ここは・・・この家・・・?

「・・・カイ・・・異世界の人間は・・・?」

声を聞いてはつとす。いつのまにか、その暗い部屋に、魔女が座っていたのだ。

「地下に閉じ込めてあります・・・でも、いったい異世界の者な

んて何の為に・・・？」

「・・・ふふ。お前がこの間盗んで来たあの禁断の書、あれに滅びの呪文が書いてあるんだよ・・・。私が滅びの呪文を唱えれば、この世界は滅びる・・・そして私がこの世界を手に入れる事が出来るよ・・・!!・・・だが、それを見るためには、異世界人の血が必要。だからあの二人を捕らえたのさ・・・。」

次の瞬間、場面が変わり、今度は地下牢のような場所が見えた。

あれは・・・お母さんとお父さん!?

「・・・だから、俺が今からあんた達を元の世界に戻す。」

カイが『禁断の書』を片手に、呪文を唱えた。

「・・・この世界における全ての神々よ、我に力を貸したまえ、この者達を、あるべき場所に・・・。」

「カイっ!!何をしている!!」

魔女が叫んで飛び込んできた。

「くそっ・・・!後少しだったのにつ・・・!!うわあっ・・・!!」

カイの体が青白い火で包まれた。

「・・・やはりこれだけ大きな術に失敗した代償か・・・!」

魔女がお母さん達に向かって青白い炎を叩きつけた。

それを咄嗟にカイが呪文で跳ね飛ばす。

「カイっ・・・!!!よくも裏切ったなっ・・・!!!わかってるんだろうなっ!!?私を裏切れば、お前の両親は二度と生き返らないぞっ!!」

魔女がカイを怒鳴りつけた。

「わかってるっそれぐらい!!!でもなっ??いくら生き返ってほしいからって、自分のために人を殺めるなんてっ、俺には出来ないんだよっ・・・!!!」

その瞬間、カイの体は完全に炎に包まれ、声だけが聞えた。

「この地に宿る精霊よ!この者達を守りたまえ・・・!!!」
炎が消え、カイは跡形も無く消えてしまった・・・。

一瞬にして駆け抜けたこの映像に、ルーナは驚きを隠せなかった。

「カイは・・・助けてくれようとしていたの・・・？」

言葉にしてみても、よけい実感が沸いた。
そうだ。カイはお母さん達を助けてくれようとしたんだ。そして、ドゥーベルさん・・・魔女は、禁断の書とお母さん達を使って、この世界を滅ぼそうとしているんだっ！！

「・・・この本はあなたには渡さないっ！お母さん達はどこっ！？」
ルーナはキツ、と魔女を睨んだ。

「・・・お前の両親？？もしや私が捕らえた異世界人の事かっ？だつたら遅かつたなっ！！そんなものづくに私が始末しておるわっ！！」

「そんなっ・・・！」

ルーナは一瞬頭の中が真っ白になった。お母さん達を始末した？

そんな・・・じゃあもうお母さん達は・・・！

「生憎だったな！！俺は禁断の魔法の失敗によって異世界に飛ばされる前っ、ルーナの両親に術をかけたんだっ！どんな事があつても絶対に殺されない魔法をっ！！それにお前が使おうとしていた滅びの魔法にはっ、異世界人の死んですぐの血を使わなければならぬはずっ、禁断の書を持たないお前にはっ、ルーナの両親は殺せないはずだっ！！」

カイの言つた事に胸を撫で下ろす。

よかった・・・お母さん達は生きてるんだっ・・・！！

「ちっ・・・術をかけただけで無く滅びの術の内容まで知っておつたとは・・・まあいいっ、小娘っ！確かにお前の両親は生きていますっ！地下室で石にされてなっ！！」

「石っ！？」

「・・・石にされたのを解くには、私が術を解くか、私が死ぬかのどちらかだっ！！残念だったなっ！両親もろともお前達も殺してやる

っ！！お前が両親に会うのは死んでからだっ！！」

魔女はそう言うと、大きな大蛇に変化した。

「きゃあっ！！」

突然襲い掛かって来た大蛇に悲鳴を上げる。

咄嗟にルーナを庇ってカイが前に出た。

「いでよドラゴンっ！！」

その瞬間、炎で出来たドラゴンが現れ、大蛇の体を締め上げた。

「うあっあああっ！！」

苦しみのた打ち回る大蛇。だが、炎の力が明らかに弱まっているように感じた。炎が無くなるのも時間の問題だろう。

「こんなところで・・・こんなところで死ぬものか・・・！！」

大蛇が懇親の力を振り絞り、カイに向かって八重歯を向け突進した。

「カイっ！！！！」

「痛っ・・・！！」

辛うじて避けたが、カイの背中に八重歯がかすり、血がにじみ出て来た。

「・・・ルーナっ！！その本の一番最後のページを開けっ・・・！！」

カイに言われた通り『禁断の書』の最後のページを開く。

「これって・・・呪文？」

「禁断の魔法の中で最大攻撃魔法だっ！それを唱えろっ！！」

「あたしじゃ無理だよっ！カイが唱えて・・・！！」

「無理だっ！二つの魔術を同時に使う事はできないっ！！」

「そんなっ・・・！だっであたしが唱えたからって術が使えるかわかんないし・・・！それにもし失敗したら・・・！！」

きつとあたし達、殺される。

「大丈夫。」

カイが自身に満ち溢れた声で言った。

「ルーナなら出来る。」

ドラゴンの炎が今にも消えかかり、もう時間が無い事を知らせた。

ルーナは本をギュッと握り締め、震える声で呪文を唱えた。

「おっ、・・・愚かなる叛逆者に、終焉をつ。神の命に逆らえし者につ、死の刻印をつ。あまたの神々よっ！我に力をつ・・・・！！」

精一杯声を張り上げた。

どうか・・・・効きますように・・・・！！

何も起こらないまま、カイが放ったドラゴンが消え、大蛇が自由になる。

やっぱりだめだった・・・・・・??

次の瞬間、大きな音と共に大蛇が青い稲妻に包まれた。

「やった・・・・！！」

大蛇が大きな悲鳴を上げて朽ち果てて行く。

「ああ・・・・・・！！うああああ・・・・・・！！！！」

最後の悲鳴と共に大蛇と魔女は跡形も無く消えていった。

「やったな！！」

「うんっ！！・・・あっ、お母さん達・・・・！！」

急いで地下に降りて行く。

「お母さん・・・・！！お父さん・・・・！！」

地下牢の中で二人は仰向けに倒れこんでいた。

「生きてる！？ねえカイっ！お母さん達生きてる！？」

「生きてるよ。死んでるわけねえつつつたる??俺が術かけたんだからっ。」

そう言っつてカイは背中傷を負ったところに手をあてて、傷を治し始めた。

「・・・魔法使えるなんて・・・本当にカイ、この世界の人なんだね・・・・。」

「何を今さら。」

自分でも今さらとは思った。さつき目の前で術を使っているところ
を見てるのに。

「・・・確かに俺はこの世界の住人だけど、魔法を使えるからってわ
けでも無いだろ。実際お前だって魔法、使ったんだし。」

「まあそれはそうだけど・・・。」

「魔法なんて要するに、その世界の性質によるんだよ。」

「性質？」

ルーナは首を傾げた。

「そつ、性質。こつちの世界では魔法を使うための神々や精霊は満
ち溢れてるけど、向こつちの世界ではそういうのが少ないんだよ。

だから別に特には『こつちの世界』と『向こつちの世界』に住んでる
奴じゃ変りはねえんだよ。」

「ふうん・・・。じゃああたし達が最初に来たあの洞窟も、精霊と
かがいつぱいいいたつてわけか。」

何か精霊だとか神様だとか。いろいろややこしいな・・・。

「・・・じゃあそろそろ行くぞ。」

「どこに？」

カイの言葉に目を丸くするルーナ。

「決まってるんだろつ。元の世界へだよっ！」

「あぁっ。」

すっかり忘れていた。

そこでルーナはあの飴を舐めた時の事を思い出し、カイに尋ねた。

「・・・ねえ。あたしね、『真実の飴』を舐めた時に、魔女がカイ
に『お前の両親は二度と生き返らないぞ』って言ったの聞いたん
だけど・・・どういう意味・・・？」

「あぁ・・・。俺の両親な、俺が4歳の時に家が火事になって死ん
じまったんだよ。それで、あの魔女が自分に仕えたら両親を生き返
らせてくれるっていうから、あの魔女に仕えてただけだ。」

「そうだったんだ・・・。」

あたし達を助けたせいで、カイは両親を生き返らせる術を失っちゃったんだ・・・

「まあどつちにしろあの魔女には出来なかっただろうけどなっ！禁断の書にも載って無かったしっ！！」

ルーナの気持を知ってか知らずか、カイが明るくそう答えた。

「じゃあ始めにここへ来たあの洞窟へテレポートするぞ。」

一瞬にして、景色が変わり、あたし達はあの洞窟の中にいた。

「あれっ？お母さんとお父さんはっ？？」

さつきまで一緒にいたはずの二人がどこにも見当たらない。

「向こうでの記憶を消して先に帰ってもらった。いろいろと面倒だからな。」

「えー？だからってこの洞窟に降りる事無いじゃん！！こっからふもとまで一時間近くかかるのに・・・」

「大丈夫だよ。ちゃんとふもとに降ろしてやるから。ここに降ろしたのは・・・ちゃんと別れ言っところと思っただから。」

カイの言葉に八つとするルーナ。

「別れて・・・カイもこっちに戻って来るんじゃないの！？」

「俺は向こうの世界の人間だ。こっちですつと暮らすわけにはいかないんだよ。」

「そんな・・・だって、おばさん達はっ！？突然カイがいなくなつたら心配するよ・・・！！」

「お前以外の人の、俺に関しての記憶は全て消してある。」

「そんな・・・」

ルーナは泣きそうになった。

カイがいなくなるなんて、思ってもみなかったから。

「俺は向こうの世界で両親を生き返らせる方法を探すよ。だから・・・元気で。」

「・・・また、会えるっ？」

「必ず・・・さよなら」。 「

カイの声が遠くなる。

次の瞬間、ルーナは自分の部屋のベッドの上にいた。

誰かがノックして、部屋の戸を開ける。

「ルーナ〜。もうそろそろ起きなきゃ・・・どうしたのその涙!?!? それにその服っ!?!」

お母さんだ。

無事にこつちに帰って来れたんだ。

「なんでも無いっ!?!今着替えるから!?!」

『・・・また会える?』カイはこの問いに、迷う事なく『必ず』と答えた。

涙は出てくるけど、不思議と悲しくは無かった。

ねえ、カイ・・・また、会えるよね・・・

空に向かって、ルーナはにっこりと笑った。

END

6 (後書き)

最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございます。からり下手で読みにくい部分もあったと思いますが、楽しんで読んでくださったとしたらうれしいです。
感想や質問など大募集です!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0571e/>

MagicTheWord

2010年11月17日06時44分発行